



2022年11月24日放送

日薬アワー 第55回日本薬剤師会学術大会 ～東日本大震災からの復興と感謝～

日本薬剤師会
常務理事 山田 卓郎

私は本年度の学術大会の運営委員長でありますので、本日は運営委員長の立場でお話をさせていただきますと思います。

毎年秋に開催されている日本薬剤師会学術大会も本年で55回目を迎えました。今年の学術大会は、1968年に東京で開催されて以来、東日本大震災の影響により初めて中止となった2011年の第44回宮城大会の仕切り直しとして、10月9日・10日の二日間、仙台国際センターを会場にハイブリット方式により開催されました。新型コロナウイルス感染症の影響により一昨年の第53回札幌大会では現地参加人数の制限、そして昨年の第54回の福岡大会は緊急事態宣言下により完全Webでの開催となり、3年振りの通常開催となる今年の大会はどれくらいの方に現地参加いただけるかの予想が立てにくい状況での事前参加登録開始となりました。

本学術大会の役割は、その時代において薬剤師の士気高揚となるようなテーマを掲げ、薬剤師が進むべき方向性を共有し意見交換をする場であると同時に、会員薬剤師たちが日頃の業務や研究成果を発表し、参加者に示す機会の場でもあります。

2011年に発生した東日本大震災は被災した地域の私たちにとても大きな試練を与えましたが、引き換えにこれまでは関係性があまり無かった人々や、異なる職種または地域の方々との“繋がり”と、そこから生まれる強い“結びつき”の大切さを教えてくれました。それは被災各地で全国から駆け付けてくれた薬剤師の頑張りによって、災害医療救護活動において薬剤師が必要不可欠であるとの認識が、国民はもとより医療従事者や行政に携わる人々の中から生まれたことによるものです。震災直後から私たちは復興の2文字を旗印に、まっしぐらにそしてがむしゃらに前に進んできました。まだまだ従前の生活に戻るまでには程遠いですが、私たちには復興から得た経験を未来に繋いでいく責務があります。そんな思いを今年の大会テーマ「結（ゆい）」～地域と共に未来へ～に込めさせていただきました。

新型コロナウイルス感染症の収束も見えず感染拡大の波が繰り返される中、大会運営に関する決定には大変苦慮いたしました。開催約1年前から本格的な準備が始まりましたが、大会開催時における新型コロナウイルス感染症の感染状況を予測することは極めて困難であり、現地での参加人数が全く読めませんでした。現地参加とWeb参加併用によるハイブリッド方式での開催は決定していましたが、現地参加人数とWeb参加者も合わせた全体の参加者数を想定しなければ、会場の決定を含めたプログラム計画を立てることが出来ないのでした。新型コロナウイルス感染症が出現する以前に開催された山口大会と金沢大会、そして2014年に東北で開催された第47回の山形大会の参加者数から、まずは全体参加者数の予想を8,000名とし、現地参加者数は大会会場となる仙台国際センターの収容人数から最大で5,500名と計画しました。計画決定後は新型コロナウイルス感染症が収束することをスタッフ全員で祈りつつ、チームごとに作業予定表に従い準備を進めました。本来であれば東日本大震災後に全国から駆け付けてくれた延べ6,000人以上の薬剤師のみなさんに対して、感謝の気持ちを込めて全体懇親会を盛大に開催したかったのですが、新型コロナウイルス感染症の感染状況を考慮し、残念ながら全体懇親会は中止とさせていただきました。

5月2日から事前参加登録が開始されましたが、新型コロナウイルス感染症の第6波も完全には落ち着いてはおらず、6月末時点での登録者数は1,000名にも達していませんでした。その後も落ち着くどころか逆にこれまでで最大となる第7波が始まってしまい、大会の約50日前にあたる8月19日には過去最多となる1日の感染者が25,000名を超えてしまいました。絶対にこの波は治まる！と信じ、県内の会員や東北5県をはじめとする全国の都道府県会長の方々に参加の依頼を続けた結果、8月31日までの事前登録期間中に約5,000名の皆様に登録をしていただけました。

これまでで最大の波となった新型コロナウイルス感染症の第7波も9月末には鎮静傾向となり、また心配していた天候にも大きな崩れはなく、10月9日・10日の両日、仙台国際センターを会場に第55回日本薬剤師会学術大会を開催することが出来ました。開会式冒頭の大会長挨拶の中で、日薬の山本会長は「今後は様々な場面で、薬局・薬剤師が役割を着実に果たしていくことが社会から強く求められている。11年前の未曾有の大災害は、日本中の薬剤師が大きな結びつきのもとで、地域住民に対して薬剤師サービスを提供する体勢を構築した。」と述べられました。またサプライズとして岸田総理からの、新型コロナウイルス感染症対策やワクチン接種体制への薬剤師の協力について感謝の意が込められたビデオメッセージが紹介され、その後に加藤勝信厚生労働大臣、永岡桂子文部科学大臣、村井嘉浩宮城県知事、郡和子仙台市長、佐藤和宏宮城県医師会会長よりご祝辞をいただきました。また厚生労働政務官となられた本田あきこ参議院議員と、7月の参議院議員選挙で見事初当選された神谷まさゆき参議院議員の2名の薬剤師国会議員も出席されました。開会式式典後には、日本薬剤師会賞6名、日本薬剤師会功労賞6名の表彰式が行われ、続く大会特別記念講演では、賀来満夫東北医科薬科大学特任教授より『新型コロナウイルス感染症が我々にもたらしたもの～現状と今後～』と題したまさに現在の状況にマッチしたご講演をいただ

きました。

なお今回の学術大会では山本会長に無理を言って、大会二日目の朝に会長講演をお願いしました。これは全国の薬剤師会会員に対して、山本会長の考えや思いを直接ご本人からお話しただく機会を設けたいと考えたからです。しかしながら正直なところ参加者が少なかつたらどうしよう・・・という不安もありましたが、当日は現地・Web を合わせて約 3,000 名の参加があり、多くの薬剤師が会長の考えや思いを聴きたいと望んでいることを確認することが出来ました。展示に関しても東日本大震災からの復興を参加者に伝えたい気持ちがあり、震災復興パネル展示や南三陸町などの物産展のブースを設けました。多くの出展企業のご協力により展示会場も大いに賑わいを見せ、学術大会を盛り上げていただきました。

今回の学術大会の参加登録者数は、10月25日時点の集計で現地参加者 5,050 名、WEB参加者が 2,385 名の計 7,435 名で、うち学生も 182 名の参加がありました。当初の参加目標は 8,000 名でしたが、新型コロナウイルス感染症が収束していない状況下で参加を躊躇された方も多く見受けられる中、東北五県をはじめとして全国の都道府県会長の皆様方の多大なるご協力により、何とかここまで参加者数を伸ばすことが出来たと思っております。

今大会はハイブリッド形式ではありますが 3 年振りとなる通常開催でもあり、また日本薬剤師研修センターの研修単位認定も今回から PECS の利用となりましたので、今後開催される学術大会の参考となる大会であると認識しています。新型コロナウイルス感染症が完全に収束していない状況でしたが、現地参加者が予想以上に多くプログラムによっては会場での混雑や QR コードリーダーでの入退場チェックの際に長蛇の列が出来てしまい、現地参加者のみなさまにご迷惑をお掛けしましたことにお詫び申し上げます。今大会での経験を来年開催の和歌山県へしっかりとバトンを渡させていただきます。

至らぬ点も見受けられたと思いますが、これでやっと東日本大震災からの一つの区切りを付けることが出来たように感じています。本当に多くの皆さんから元気をいただき、そして支えてもらい第 55 回日本薬剤師会学術大会を終えることが出来たことに、心より感謝を申し上げ、本日の私のお話を終えたいと思います。本当にありがとうございました。